

大和郡山市文化財調査概要23

奈良県大和郡山市小泉町

# 六道山古墳Ⅰ

第2次緊急発掘調査報告書

1992

大和郡山市教育委員会

大和郡山市文化財調査概要23

奈良県大和郡山市小泉町

# 六道山古墳 I

第2次緊急発掘調査報告書

1992

大和郡山市教育委員会

## 例言

1. 本書は、奈良県大和郡山市小泉町字六道1594番地他に所在する六道山古墳の第2次緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、宗教法人慈光院（大和郡山市小泉町865番地 代表役員尾関紹保）による墳丘裾部の無断・無届けによる破壊工事を受け、緊急に実施したものである。
3. 調査主体は大和郡山市教育委員会、調査期間は、1991年9月11日～9月27日までである。現地は市教育委員会技師服部伊久男・山川均が担当した。
4. 調査には下記の作業員・補助員が参加した。  
（作業員）岸田勝信・中川憲・堀川正治・谷渕喜一  
（補助員）下大迫幹洋・本村充保（以上奈良大学）、武田浩子
5. 本書の執筆分担は目次に記す通りであり、全体の編集は服部が担当した。

## 本文目次

I 調査の契機と経過	1
① 契機と経過	（服部 伊久男）… 1
② 調査日誌	（服部）… 3
II 六道山古墳の概要	（服部）… 4
III 調査の内容	… 12
① 破壊の惨状	（服部）… 12
② 盛土の状況	（山川 均）… 13
IV 出土遺物	… 23
① 土器	（下大迫 幹 洋）… 23
② 石器	（山川）… 24
V ま と め	（服部）… 25

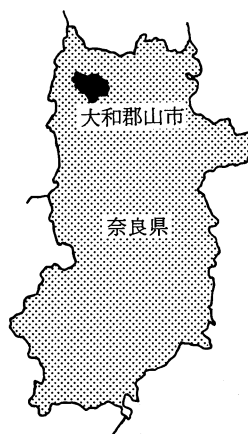
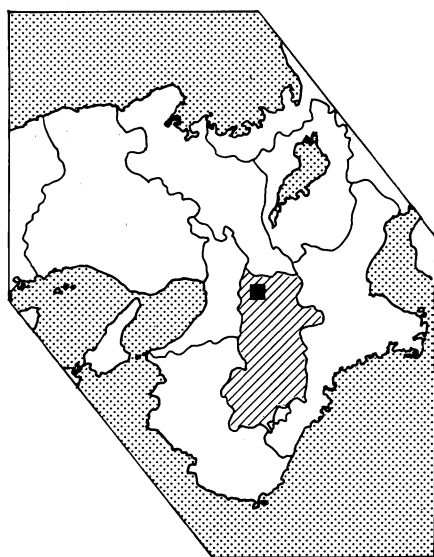
## 図目次

- 図1 六道山古墳位置図（S = 1 : 50,000）
- 図2 六道山古墳と周辺の遺跡（S = 1 : 20,000）
- 図3 『大和国古墳墓見取図』にみえる六道山古墳
- 図4 六道山古墳の周辺地形（S = 1 : 5,000）
- 図5 六道山古墳近傍の地籍略図

- 図6 1981年の調査トレンチ
- 図7 六道山古墳の旧状 (S=1:3,000)
- 図8 破壊部分 (S=1:1,500)
- 図9 削平部の断面略測図 (S=1:800)
- 図10 削平部平面略測図 (S=1:800)
- 図11 柱状図 (S=1:80)
- 図12 西側破壊部土層図 (S=1:80)
- 図13 東側破壊部土層図No.1 (S=1:80)
- 図14 東側破壊部土層図No.2 (S=1:80)
- 図15 六道山古墳出土土器実測図 (S=1:3)
- 図16 六道山古墳出土土器実測図 (S=1:7)

写真目次

- 写真1 破壊現場 (墳丘西側、北から)
- 写真2 削られた墳丘 (東北から)
- 写真3 削られた墳丘 (南西から)



大和郡山市の位置

## I 調査の契機と経過

### ① 契機と経過

1991年9月5日午後3時、六道山古墳破壊の第一報がもたらされた。市内の主要古墳の一つであり、県内全域をみても大形の部類に入る前方後円墳である六道山古墳に破壊の手が伸びようなどだれも予想だにできなかったことである。急遽、市教育委員会が現地に赴いたが、はたしてバックホーで墳丘を削り、削土を2トンドンプカーで搬出しているところであった。墳丘裾が幅3～4m、高さ2～6mにわたって切り取られ、重機の爪跡が破壊のすさまじさを語っていた。早速、現状の写真撮影を行い、現地の請負業者から事情を聴いた上で工事中止を依頼した。帰庁後、内部協議を行い、県教育委員会文化財保存課、慈光院、市計画課、県郡山土木事務所等の関係機関へ連絡、翌日9月6日午前10時から現地で県教委・市教委・慈光院が協議することとなった。同日、慈光院側から事情を聴取、9月9日、市役所で正式協議をもち善後策を協議することが了解された。

9月9日、慈光院側出席の下で正式協議の場について、①即時、工事を中止すること、②現場の安全管理・養生をはたすこと、③至急、埋蔵文化財発掘届出書を提出すること、④破壊部分の緊急調査を市教育委員会が実施すること、⑤今後の発掘調査には全面的に協力すること、⑥今後の計画については見直しを含め県・市側と十分な協議を経ること、等が申し合わされ、最終的に、復旧については県・市の行政指導に全面的に従う旨が了解された。また、工事実施に至る直接的原因について慈光院側は、落葉、雑木等の手入れ、隣地からの境界侵害をあげている。

なお、同日、折しも開催中の県議会文教委員会で質問が出され、県教委では原状復帰を求める旨を返答している。

翌、9月10日には、県議会で取り上げられたこともあって、各新聞で一斉に報じられ、市民や文化財愛護団体から厳しい批判が寄せられた。

9月11日から9月27日にかけて、市教委が応急処理的な調査を実施し、墳丘の構築方法や築造時期に関する貴重な知見を得ることができた。

その後、この調査成果や調査時の測量図を基に、県教委と市教委で復旧案を策定、慈光院側と復旧について協議することとなった。

10月15日、市役所で第2回目の三者協議を行った。県・市側の復旧案を口頭で説明、簡単な標準断面図を示しつつ、相手方に復旧工事の設計図を提出するよう求め、相手方もこれを了承した。

11月25日、市役所で第3回目の協議をもつ。前回示した復元案の実現性について諸々の問題が提示されたが、県教委・市教委では再度現地を観察し、土木計画課職員の専門的助言を得つつ、より構造的にも、かつ、予算面でも安定した復元案を提示できるよう双方協力の上、再度検討を進めることとした。

12月11日、第4回目の協議を市役所で開く。この場で最終合意が成立、慈光院側が復旧工事の設計図を市・県に提出、高覧の上、市・県が判断し工事着手を諒解するという合議であった。翌年、

実施設計図が提出されたので市・県で図面を検討し、工事着手を認めた。

顛末は以上の通りであるが、行政側と寺側の文化財保護に対する認識の相違が浮き彫りにされ、話が平行線をたどることもしばしばあった。今後は、相互に意志の疎通を図り、貴重な文化財を後世に託せるよう努力してゆきたいと思う。



写真1 破壊現場（墳丘西側、北から）

## ② 調査日誌

1991年

- 9月11日（水）本日より調査開始、資財搬入後、墳丘裾の削平部に閉合トラバースを組む。
- 9月12日（木）西北裾部から断面の精査に入る。昨日の閉合トラバースに連続する閉合トラバースを墳丘部に組み込む。
- 9月13日（金）雨天中止、整理室でトラバース計算、検算、図化を行う。
- 9月17日（火）西側断面精査、盛土内から石鏃1点が出土する。平板測量を開始、縮尺1/100。
- 9月18日（水）雨天中止、出土遺物の洗浄。
- 9月19日（木）雨天中止、洗浄遺物の記名。
- 9月20日（金）東裾部の平板測量、西側断面図作成、南～南東側壁精査。
- 9月24日（火）西側断面図の土層名記入、平板測量続行。
- 9月25日（水）東断面の実測及精査。黒褐色土から弥生式土器多数出土。
- 9月26日（木）東断面で実測等、南端部盛土内から須恵器出土。
- 9月27日（金）南端部の断面図作成。墳丘の断面略図を2ヶ所で作成、本日で調査を終了する。

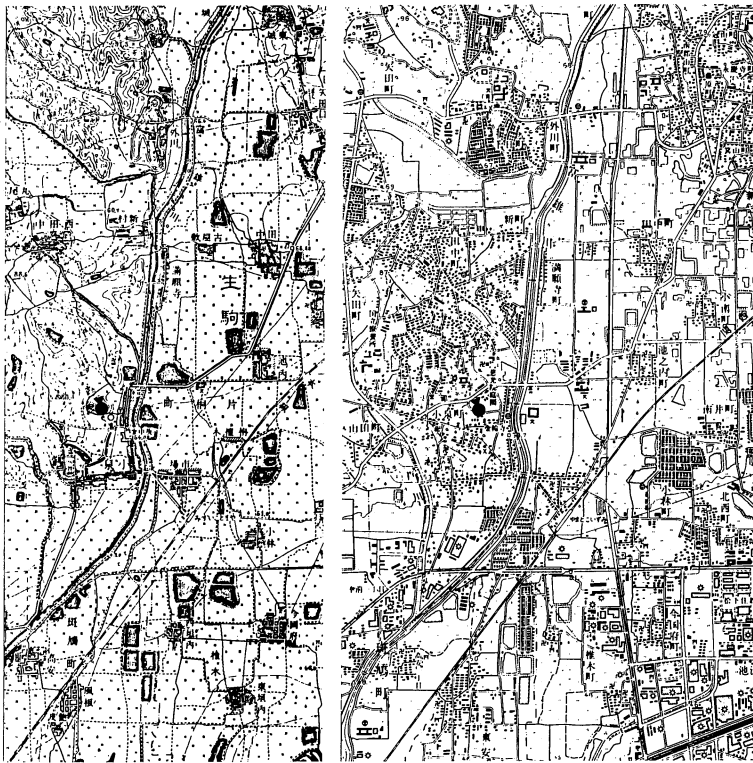


図1 六道山古墳位置図（S = 1 : 50,000）

右：国土地理院 1 : 25,000地形図「大和郡山」1984年使用  
左：地理調査所 二万五千分一地形図「郡山」大正11年測図昭和30年資料修正使用





六道山古墳に関する文献で古いものに〈さほど古くはないが〉、明治26年県属野淵龍潜によって編まれた『大和国古墳墓見取図』及び『大和国古墳墓取調書』がある。『見取図』には、書名の如く墨彩で墳丘が描かれ下記のような添書が記されている。

「第百貳拾五号

添下郡片桐村大字小泉第千五百拾四番地字六道

一古墳墓反別六畝廿五歩

官有地」

とあり、また、

「官林」

「高三間半

根廻五十五間」

と記入されている。高三間半は約6.3m、根廻五十五間は99m、面積六畝廿五歩は約800m<sup>2</sup>に換算される。

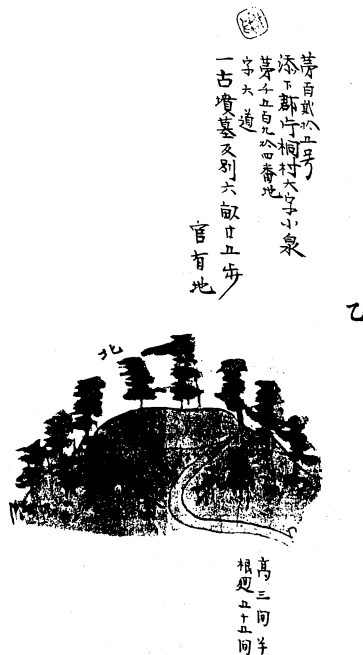


図3 『大和国古墳墓見取図』にみえる六道山古墳

また、『取調書』には、

「第百二十五 百二十六 百二十七号ノ三塚ハ第百二十一号ノ塚ト同ジ」

とある。ちなみに第121号には、

「第百二十一号 平群郡平端村大字西ニ在リ所傳及古書等ノ編ルベキナシト雖モ其構造ヨリ推考スルモ決シテ普通ノ塚ニ非スト考フ」とある。つまり、出土遺物などに関する情報がまったく得られなかったということである。

一方、大正14（1925年）、縣より発刊された『奈良縣史蹟勝地調査會報告書 第八回』に「縣内御陵墓・傳説地及び古墳墓表」が収められており、生駒郡の部の中に六道山古墳の記載がある。すなわち、

名称	形状	周囲	所在地				地目	面積		広狭	所有者
			町村	大字	字	番地		畝	歩		
六道塚	円形	畑・人家山林	片桐	小泉	六道	1594	墓地	6	25	東西20間 南北16間	官有

とある。当時はまだ前方後円墳という認識はなかったようである。また、この一覧表は野瀧の取調書をもとに作成されたものであるため両者の記述はほぼ一致している。

その後、六道山古墳については語られることはなかったが、1974年（昭和49年）によりやく具体的・考古学的な知見が公表される。これが、今日、広範に引用される『奈良県の主要古墳Ⅰ』である。まず、その記述内容を引用しておこう。

「…（略）…最近前方部が削平されて、駐車場となってしまったが、後半部<sup>(ママ)</sup>に比して著しく短かくかつ低平な前方部をもった帆立貝式に近い形態の前方後円墳である。墳丘長約100m、後円部径約75m、同高14m、前方部幅50m、同高約6mを測った。周濠は存在しないが、墳丘の周囲に幅約30mの一段高い部分があって一種の周庭帯ともいふべき馬蹄形の区画を形成している。内部構造や副葬品は明らかでない。築造年代についても墳丘の形態がきわめて特異なもので比較の材料がなく明確にしないが、古墳時代の前半期のものであることはまず確実といえよう。……（略）……」

この知見をもとに前期末葉～中期前葉の年代が付与されるに至っており、当該地では小泉大塚古墳（全長80m前方後円墳、竪穴式石槨）に継ぐ在地系首長墓と考えるのが一般的傾向であった。

冒頭で述べられているように、現在、前方部が削平され駐車場となっているため前方部の規模はこの数値によるほかはない。また、後円部も西側裾部が削られていたため、なおかつ、今回も詳細な測量を実施していないため、墳丘規模については全面的に従っておきたい。ただ、墳形については、後円部は2段築成であること。頂部平坦面径は約22m、2段目高は約8m、2段目裾部径約50m、段築面幅約7m、第1段目高約6m、という計測値を追加しておきたい。

次に現状をみておこう。古墳は矢田丘陵の南東裾部、北西から南東方向にのびる丘陵端に立地し、前方部は西北面する。主要地方道奈良大和郡山斑鳩線が前方部前面に併行するように北東－南西方

向に走っている。既述のように前方部はバラス敷の駐車場と化している。墳丘の西側には分譲住宅が立ち並び、また、東側にも宅地開発が進んでいる。わずかに、南及び南東側が果樹園となり旧態を保っているが、その果樹園の東南及び南側に幅3mの道路が敷設され、早晚、この果樹園の部分も開発が及ぶことが懸念される。後円部には雑木が繁茂し比較的大きな木がある。所々、崩壊している箇所が見受けられるが、全体的にみて遺存状態は良い。墳頂部にはかつて小規模な堂祠が建っていたという。その基礎部分と思われるところが高0.5mほど盛り上がっている他、大きな盗掘坑もなく幅広の平坦面を成している。堂の解体時に捨ておかれた棧瓦片が若干散布しているが、埴輪や葺石は認められない。



図4 六道山古墳の周辺地形 (S = 1 : 5,000)  
 大和郡山市基本図(14)(15) 1 : 2,500 1990年測図使用

次に古墳の旧状についてまとめておく。まず地籍図を検討しておこう。地籍図には古墳の平面形がよく残っている。後円部の裾廻りから西側くびれ部を経て前方部に至る痕跡が特に明瞭である。また、墳丘の外側には墳丘を取り囲む馬蹄形区画の痕跡もよく残っている。この痕跡について『主要古墳Ⅰ』では周濠とせず「一種の周庭帯」という言葉で表現しており、さらにこの部分が「幅約30m」の規模で周辺地よりも「一段高く」なっていたという。つまり、凹地形となり、さらに外堤に相当するものがあれば周濠と認識したであろうが、逆に一段高い地形で外堤も無かったために「周庭帯」という用語で説明されたのであろう。確かに地籍図で周辺地との高低や外堤の痕跡を指摘するのは難しい。ここで留意されるのは、現在、後円部の南東に残る幅約5m、南北長約10mの堤状の遺構である。この遺構は「周庭帯」の東端部にあり、当時、古墳を全周するような形で敷設されていたのか、あるいは周辺部を開発する内にたまたま残存したものか今となっては判断できない。今後の課題としておきたい。



図5 六道山古墳近傍の地籍略図

さて、この周濠の有無については、1981年に榎原考古学研究所が実施した調査で否定的所見が提出されている。調査時のトレンチは図6の通りであり、A-1トレンチが完全に周庭帯状（周濠状）遺構の中に設定されている。表土下50cmで地山面に至り、トレンチの南端部で南へ向う緩傾斜面となることが判明している。また、A-2トレンチとBトレンチでは、粘土層や砂層の堆積が著しく地山面は表土下約2mで検出されている。こうした状況から六道山古墳に周濠が伴う可能性は低いが、馬蹄形のテラスが存在した可能性は強い、と考えられている。「一種の周庭帯」から「馬蹄形状のテラス」と用語は変化したもの、いずれも周濠の存在には否定的である。現時点でもやはりA-1トレンチの所見を重視して周濠は無かったと考えておきたい。

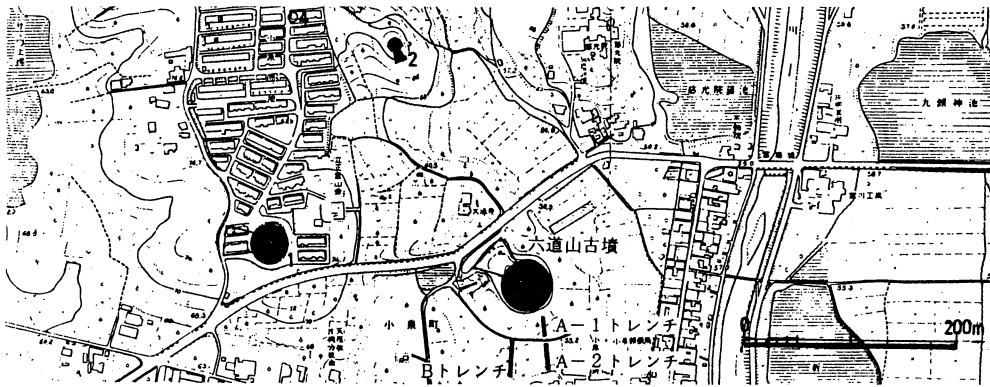


図6 1981年の調査トレンチ（「六道山古墳周辺試掘調査報告書」（1982）より）

次に前方部前面の状況について触れておく。かつて現在の県道部分に大きな堀割状の遺構があり、道路と現駐車場の北端部分はこの堀割状遺構を埋め立てて造成されたいといわれている。つまり、北西方向からののびる丘陵の尾部を切断し古墳と周辺地との画定をはたしていたことが判るが、その規模、あるいは馬蹄形のテラスとの取り付け方などは不明である。

ここで重要な知見をもたらす情報がある。1963年（昭和38年）に大和郡山市が都市計画図作成の為に撮影した航空写真である。図版1に六道山古墳を拡大して載せてあるが、古墳の形状と周辺の様子が良好に読み取れる。北西から南東方向にのびる丘陵の最末端部を利用して墳丘を築く。周囲は南東方に開く谷状地形である。確かに前方部は短い、前方部の幅はよく発達している。後円部の西側では2段築成の状況が読み取れるが、他の部分では樹木の繁茂により不明である。墳丘周囲の馬蹄形の平坦面がある。ただ、周辺地形から切り離された完全な馬蹄形を成すわけではない。おそらく丘陵の形状に規制されたものであり、その幅も丘陵分岐部の幅とほぼ等しい。また、前方部と周辺地形は丘陵切断で画するが、この部分に特に広い平坦面を造作するわけではない。注目されるのは、後円部南東側の平坦面が張り出していることである。丘陵末端部の未成形による単なる残存地形かもしれないが、いわゆる別区のような施設であった可能性がある。その規模はおよそ20m×50mほどである。後円部の周囲に別区を設けるのは、福岡県八女市岩戸山古墳に著名であるが、

こうした典型的別区と同様の施設であるかどうかは今後の詳しい検討を経なければ判明しないが、  
とりあえず注意を喚起しておきたい。

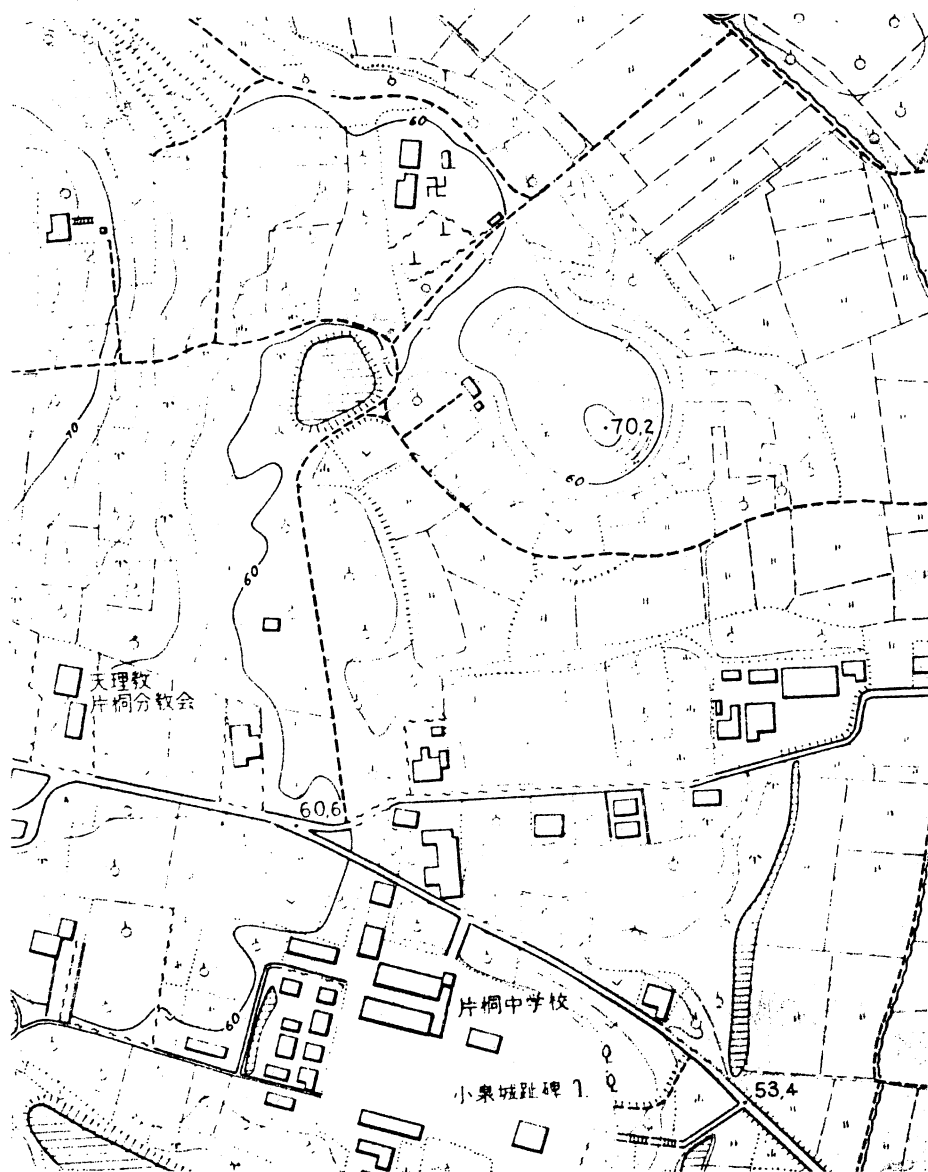


図7 六道山古墳の旧状 (S=1:3,000)

大和郡山市都市計画図9 縮尺 1:3,000 (1964) 使用

以上、幾つかの資料を用い、六道山古墳の旧状について検討したが、これ以上の詮索は推測域に止まるものであるので一応の区切りとする。今後の新たな資料の発見に務めたいと思う。

さて、再び『主要古墳』の記載に戻ろう。後円部径75m、高さ14mという数値は妥当なものであろう。さらに、今回の墳丘踏査と略測によって、後円部第1段目高約6m、第2段目高約8m、等の計測値が得られることは先に記した通りである。次に前方部の規模について検討しておこう。

「…前方部幅50m、同高約6m…」と記載されており、前方部高と後円部第1段目高がほぼ一致することが知られる。このことは「著しく短かくかつ低平な前方部」という記述と符合するようだ。つまり、前方部に段築がなく、後円部第1段目と同じ高さで付設されていたと考えられるのである。前方部の長さは、全長100mから後円部径75mを差し引いた約25mほどと考えられる。つまり、「造出し」と表現するには長く、明確な“前方部”というには段築もなく低平に過ぎ、結局、「帆立貝式に近い形態の前方後円墳」との表現に落ちつくのである。今後は、特に前方部の状態を示す資料の発掘に務めたいと思う。

以上、六道山古墳について、これまでに明らかにされた種々の資料を中心に検討してきた。とりあえず、その概略を簡条書きにまとめておく。

(立地) 矢田丘陵東南裾部、北西から南東方向に伸びる尾根状地形の最末端部に立地、周辺中心との画定は丘尾切断による。

(墳丘) 平面的には前方後円墳であるが、前方部は低平である。規模は全長約100m、後円部径約75m、同高約14m、前方部長約25m、同幅約50m、同高約6m、段築面幅約7m、第2段目高約8m、墳頂部径約22mを測る。

(外部施設) 埴輪は認められるが墓石は無い。周濠は付設されないが、墳丘周囲に馬蹄形のテラス面をもつ。このテラス面の南東部が外に張り出し、別区のような遺構であった可能性がある。

### III 調査の内容

#### ① 破壊の惨状

墳丘西側で削平された部分は、2段目の裾部であり、東～南側では第1段目の裾部に相当する。総延長約120mにわたり文字通りざっくりと破壊されていた。わずかに南々西部で長さ約 mが削られずに残っている状況であった。断面にはバックホーの爪跡が無残にも残り、垂直に近い急崖を成し、今にも崩壊しそうな様子であった。断面には黒褐色の土層が見え、土器片が多数含まれているのが観察された。と同時に、黒褐色土層はどの部分の断面にも認められ、ただならぬ様相が予想されたのである。

今回の調査は、削平部の断面を中心に行った。断面精査後、写真撮影と断面実測を行い、総延長約100mにわたり断面実測図を作成した。平面的調査は行わなかったが、簡略な測量を実施し、削平の範囲を平面的に把握するようにした。測量は $S = 1 / 100$ で行い、将来の墳丘測量にもそのまま適用できるよう測量範囲を分割して実施した。墳頂部や段築面に保存杭を固定し将来に備えることとした。

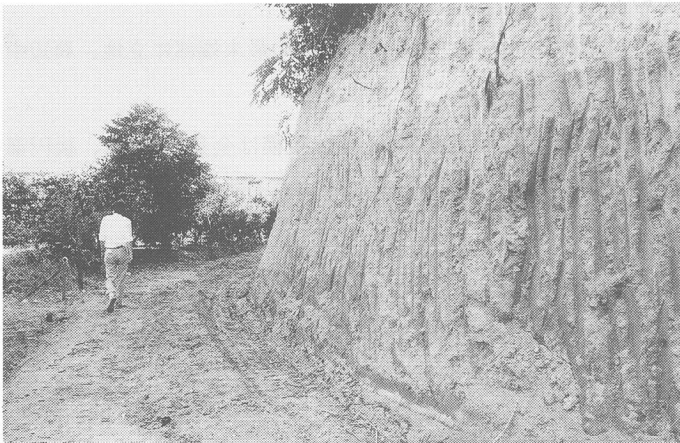
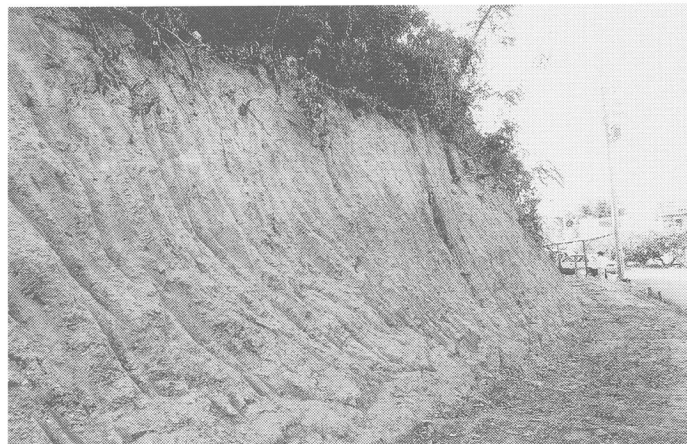


写真2  
削られた墳丘（東北から）

写真3  
削られた墳丘（南西から）





## ② 盛土の状況

今回の緊急調査では、重機によって削られた部分を人力によって平滑にし、土層の観察ならびに実測を行った。実測には墳丘南側の未破壊部分を境とし、西側、東側にわけて実施した。なお、平面図（図10）のアルファベットは、断面図のそれと対照する。

また、前章でも述べたように、西側の破壊は墳丘の段築の2段目にあたり、東側のそれは1段目に相当する。必然的に両者にはレベル差（約6m）があり、後者では地山がみられるが、前者ではそれがみられず、全てが盛土であるなどの違いがある。ただし、盛土については基本的によく似た構造を示しており、レベル差による構造的な違いを指摘することはできない。

なお、応急の調査による土層図であるため、実測範囲は墳丘をとり巻くように湾曲し、かつレベル差も相当にある。そのため、ここに示される土層は実際以上に錯綜したものと視認されるであろう。以上の諸点を踏まえたうえで、西側および東側破壊部の土層について、項を分けて述べる。

### (1) 西側破壊部の土層（柱状図＝図11：土層図＝図12）

柱状図に明瞭に示されるように、実測範囲に相当レベル差があるため、土層を検討する条件としてはあまり良好とはいえない。したがってここに述べる事項もごく表層的な観察事項に留めたい。

盛土は基本的には濃い褐色を呈する層、およびバイラン土、さらにバイラン土を含む茶褐色粘土質土の平行堆積状況を示す。これらは比較的堅くしまっており、墳丘築造時にある程度のたたきしめが行われた可能性を示している。また、土層図でみられるように北から南へ向けての斜行する堆積状況も看取される。このことは、墳丘築造の工法を知る上で興味深いものといえる。

なお、盛土中には弥生土器（Ⅲ～Ⅴ様式）、およびサヌカイト製剥片を包含している。これは後述の東側土層も含めて、盛土全般に共通する事項であるが、それは特に濃褐色土層（柱状図および土層図のトーン部分）において多くみとめる。本古墳の近隣には弥生遺跡として著名な慈光院裏山遺跡等が所在しており、該地にも弥生集落が存在したものとおもわれる。すなわち、本古墳は弥生集落と重複し築造されている可能性が高い。また、埴輪や須恵器等、古墳と直接係わる遺物はここで出土していない。

### (2) 東側破壊部の土層（柱状図＝図11：土層図＝図13～14）

当該地区では、西側に比して地区内のレベル差がないため、各層間の相関も比較的良好にとらえることができた。また、既述の通りここは墳丘の1段目に相当するので、セクションには地山も含まれる。

層序の特徴としては、西側と同様にバイラン土、濃褐色土層、およびそれらの混成層による平行堆積状況を示す。また、各々に弥生土器、ならびにサヌカイト製打製石器や剥片等を含んでいる。さらに、ここでは柱状図d層（土層図第⑥層）、すなわち盛土中よりTK-47型式に属する須恵器が出土している、このことより盛土自体の年代（古墳上限年代）は5世紀末～6世紀初頭とすることができよう。

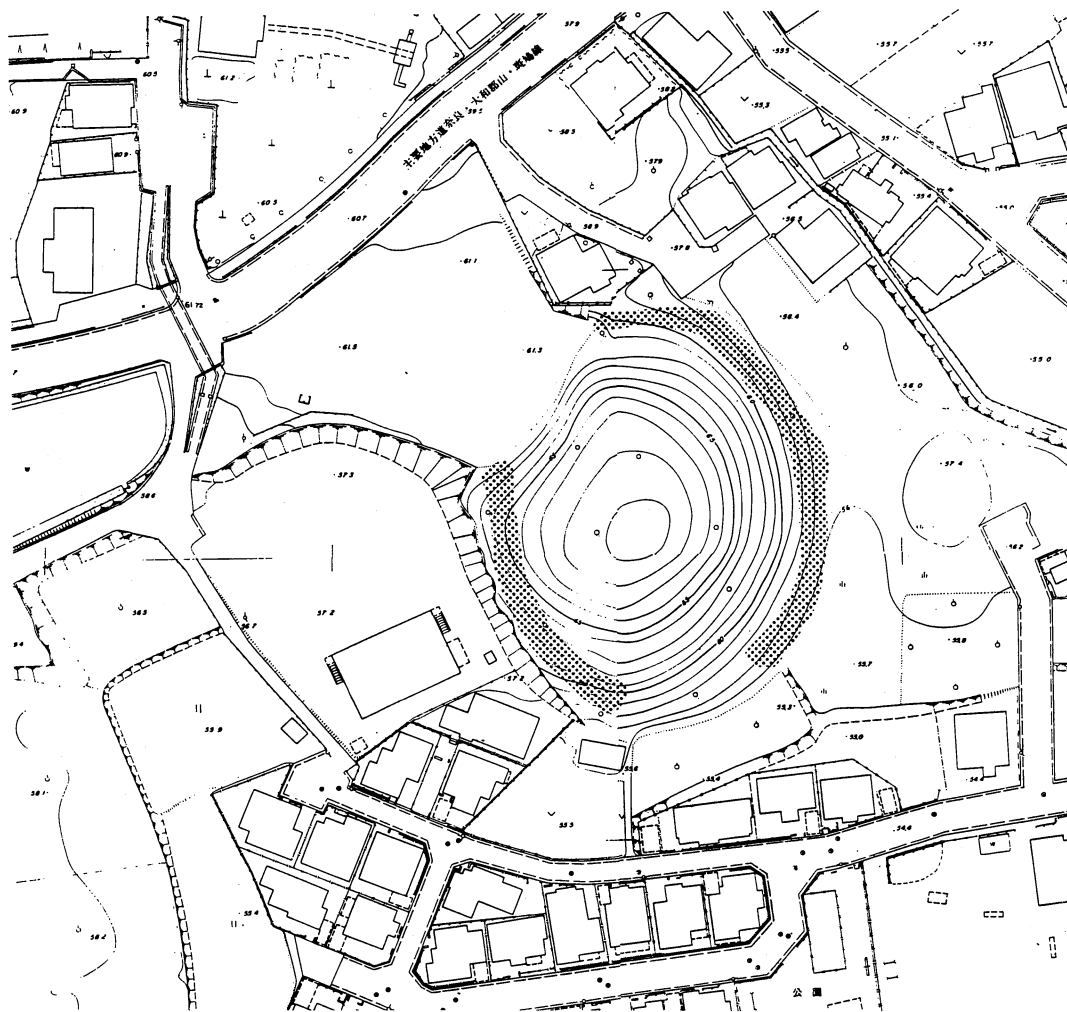


図8 破壊部分(網目トーン部分) (S=1:1,500)  
 大和郡山市道路台帳平面図1/500 04-3-15、04-3-20、04-4-11、04-4-16(1983)使用

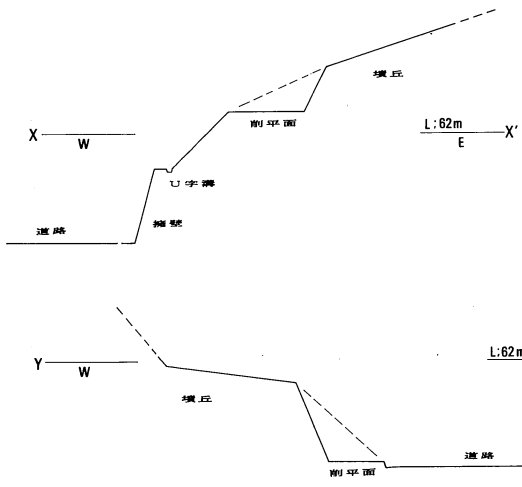


図9 削平面の断面略測図 (S=1:800)

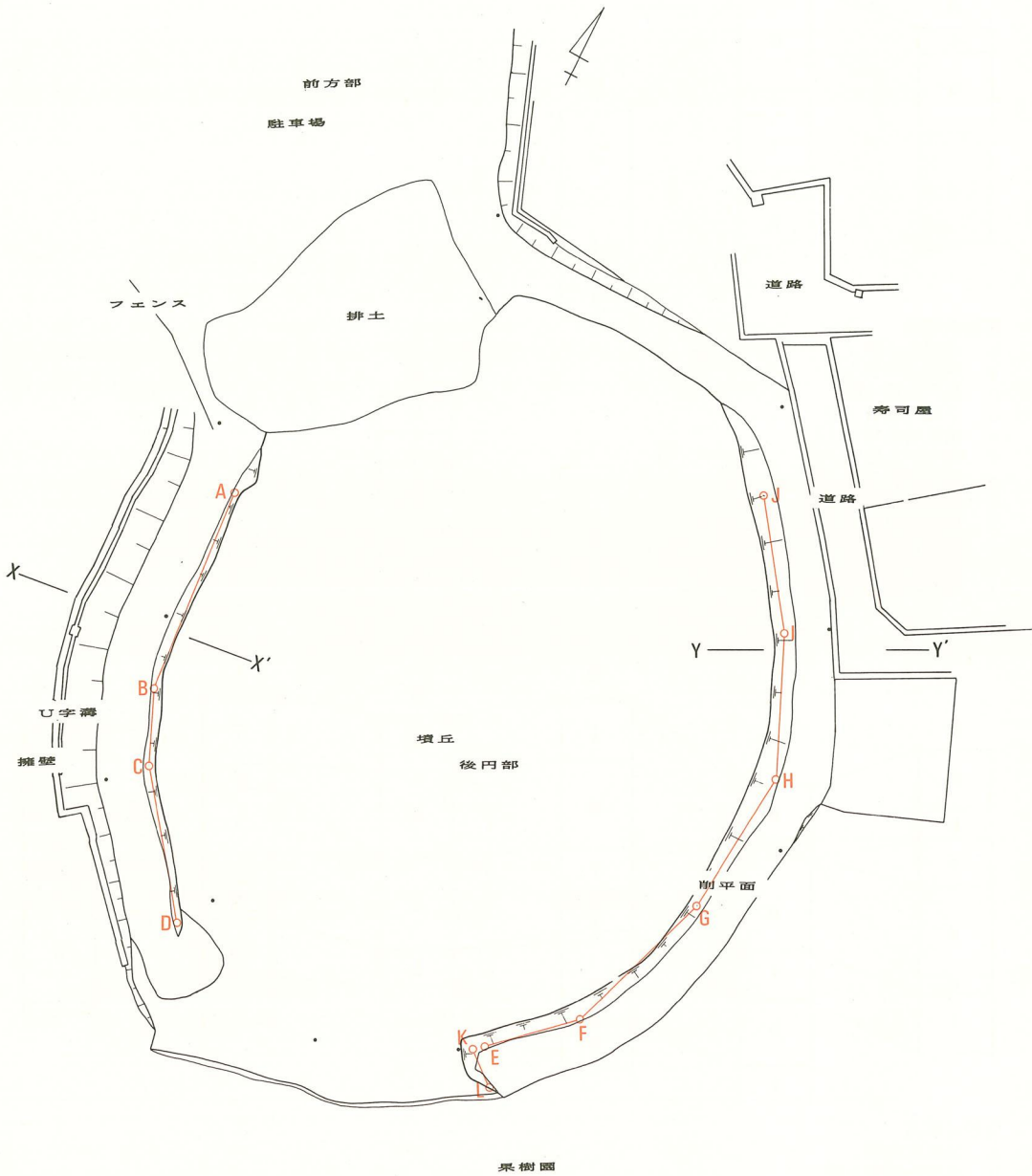


図10 削平部平面略測図 (S = 1 : 800)

・はトラバース点

なお、地山の上面は標高57mあたりに認められる。明茶褐色の礫および粗砂～微砂からなり、上部大阪層群に該当するものといえる。

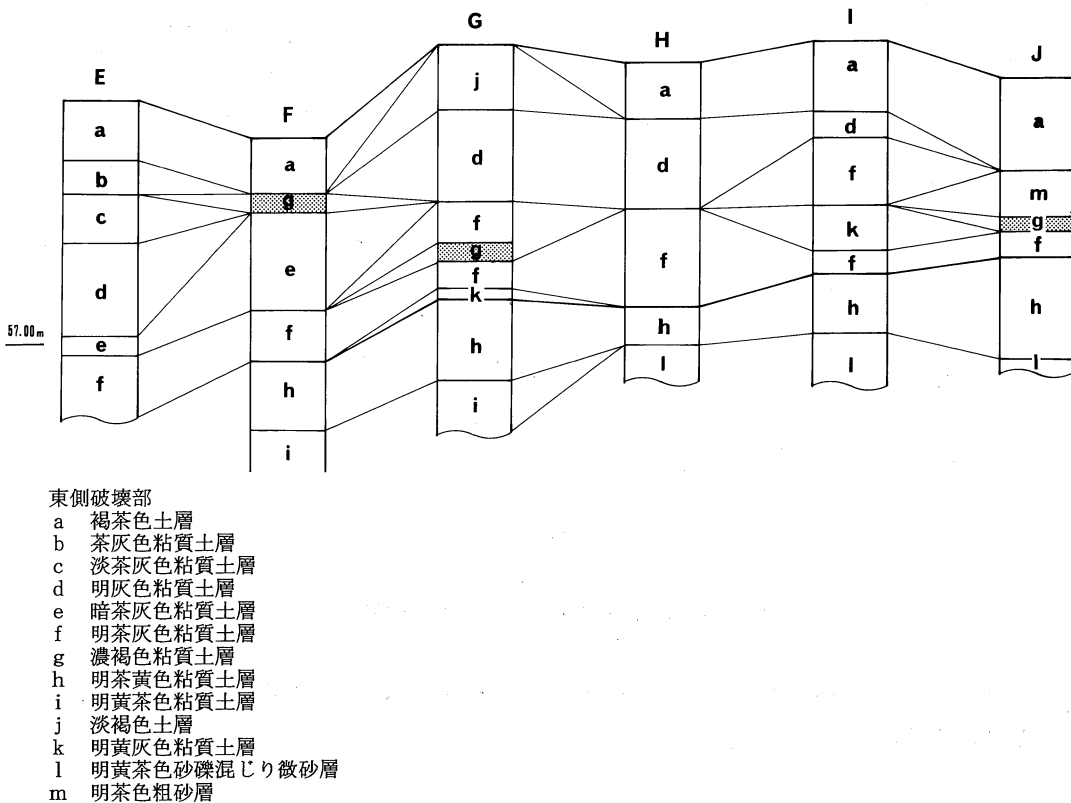
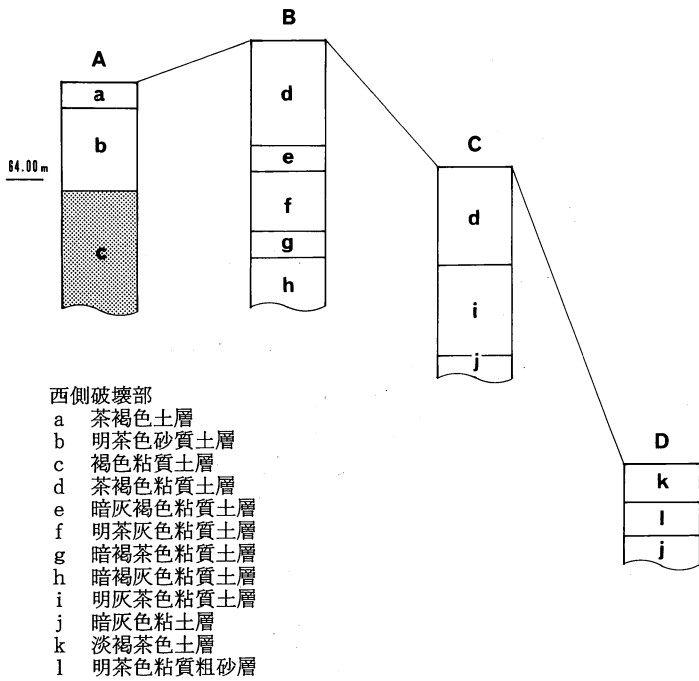
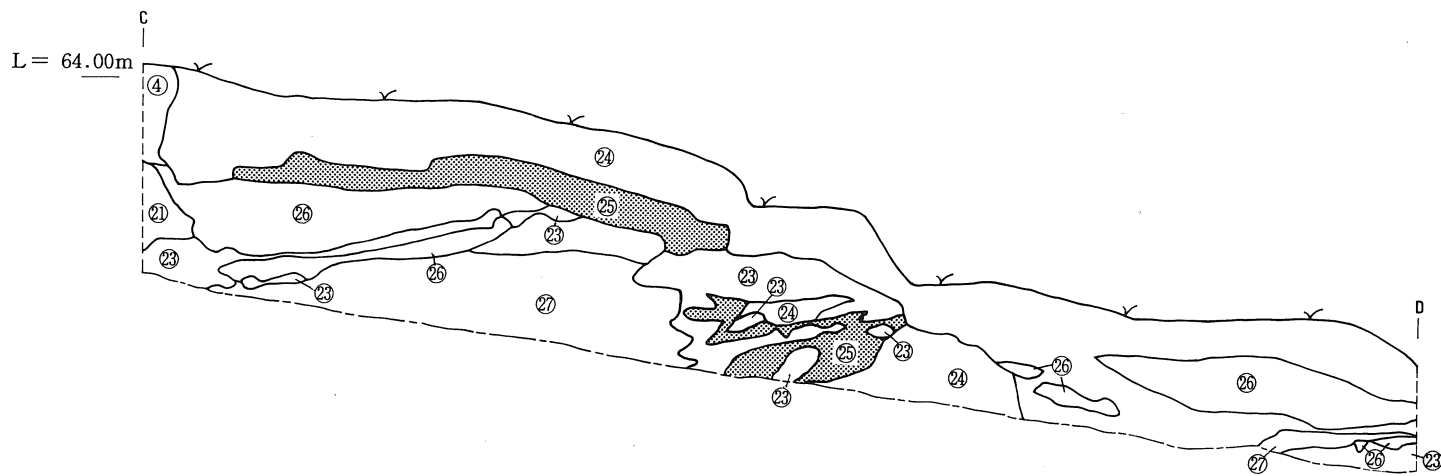
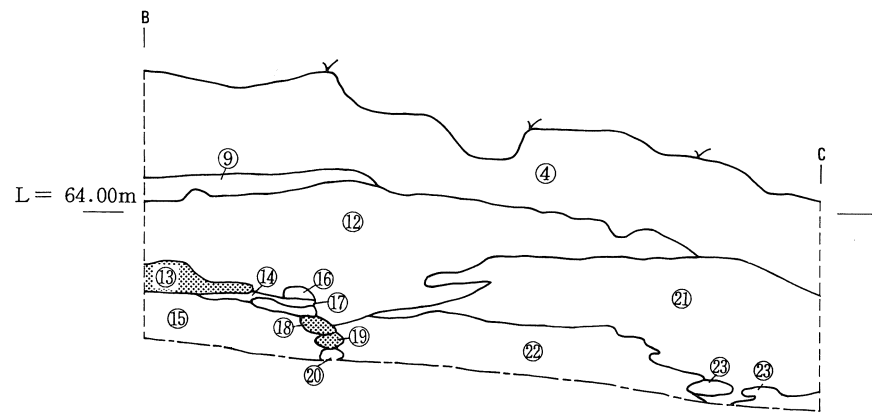
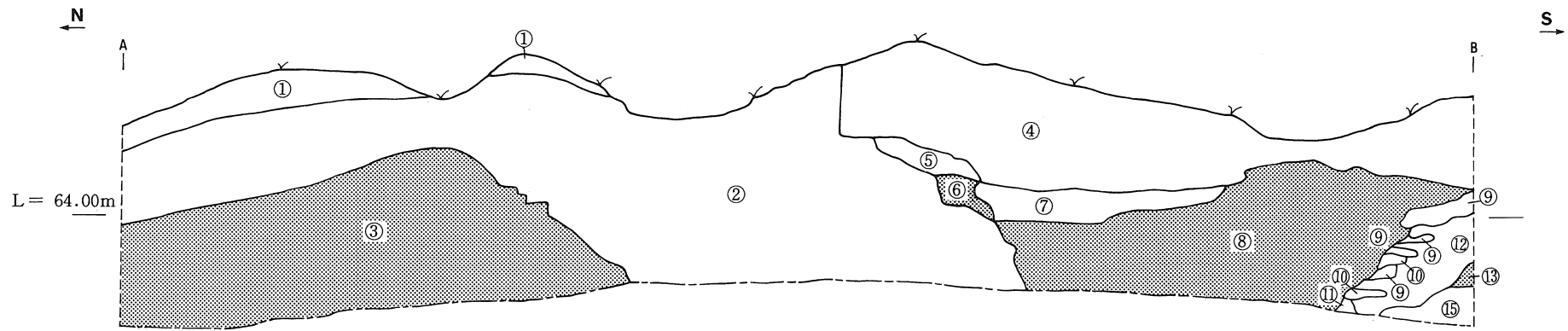
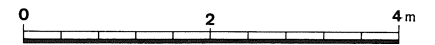


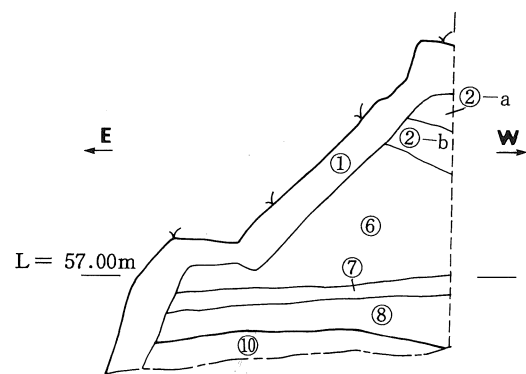
図11 柱状図 (S = 1 : 80)



- |            |            |
|------------|------------|
| ① 茶褐色粘質土層  | ⑮ 暗褐色粘質土層  |
| ② 明茶色砂質土層  | ⑯ 明赤茶色細砂層  |
| ③ 褐色粘質土層   | ⑰ 暗灰色粘質土層  |
| ④ 茶褐色粘質土層  | ⑱ 濃褐色粘質土層  |
| ⑤ 淡茶色粘質土層  | ⑲ 濃褐色粘質土層  |
| ⑥ 暗褐色粘質土層  | ⑳ 赤茶色粗砂層   |
| ⑦ 茶色粘質土層   | ㉑ 暗灰茶色粘質土層 |
| ⑧ 褐色粘質土層   | ㉒ 淡茶色粗砂層   |
| ⑨ 暗灰褐色粘質土層 | ㉓ 暗灰色粘質土層  |
| ⑩ 灰茶色粘質土層  | ㉔ 淡褐色土層    |
| ⑪ 茶灰色粘質土層  | ㉕ 暗褐色土層    |
| ⑫ 明茶灰色粘質土層 | ㉖ 明茶色粘質粗砂層 |
| ⑬ 暗褐色粘質土層  | ㉗ 褐色粘質土層   |
| ⑭ 明茶色粗砂層   |            |

图12 西側破壞部土層圖 (S = 1 : 80)





- ① 褐茶色土層
- ②-a 茶灰色粘質土層
- ②-b 淡茶灰色粘質土層
- ③ 明茶色粗砂層
- ④ 灰茶色粘質土層
- ⑤ 濃褐色粘質土層
- ⑥ 明灰色粘質土層
- ⑦ 暗褐色粘質土層
- ⑧ 明茶灰色粘質土層 (地山)
- ⑨ 明茶色粗砂混じり粘質土層 (地山)
- ⑩ 明茶黄色粘質土層 (地山)
- ⑪ 明黄茶色粘質土層

- ⑫ 淡褐色土層
- ⑬ 褐灰色粘質土層
- ⑭ 明茶褐色粘質土層
- ⑮ 緑灰色粘質土層
- ⑯ 淡灰色粘質粗砂層
- ⑰ 明灰色粘質土層
- ⑱ 茶褐色粘質土層
- ⑲ 淡灰茶色粗砂混じり粘質土層
- ⑳ 淡灰色粘土層
- ㉑ 暗灰褐色粘質土層
- ㉒ 暗灰色粘土層
- ㉓ 明黄灰色粘質土層

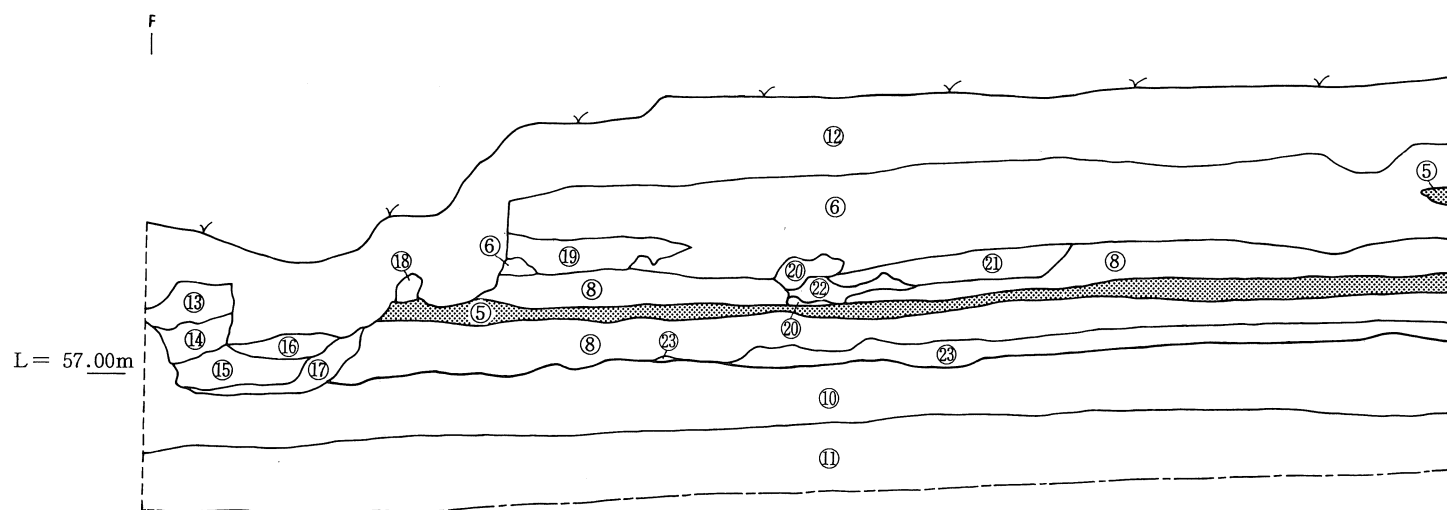
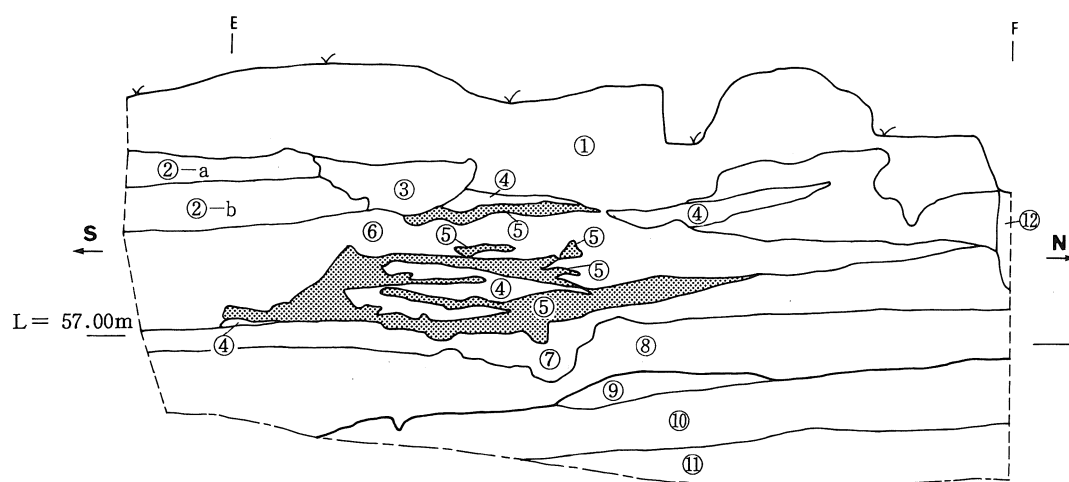
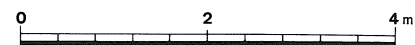


図13 東側破壊部土層図No.1 (S = 1 : 80)



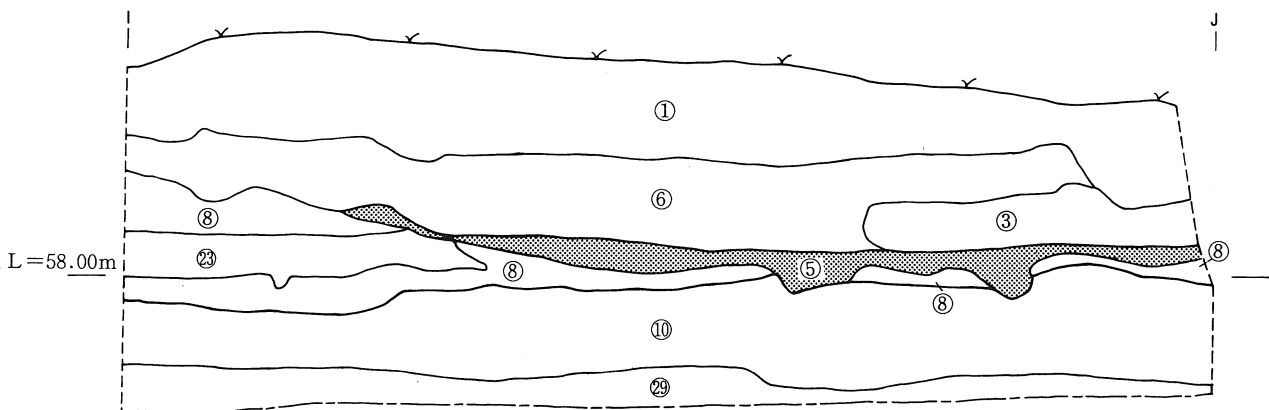
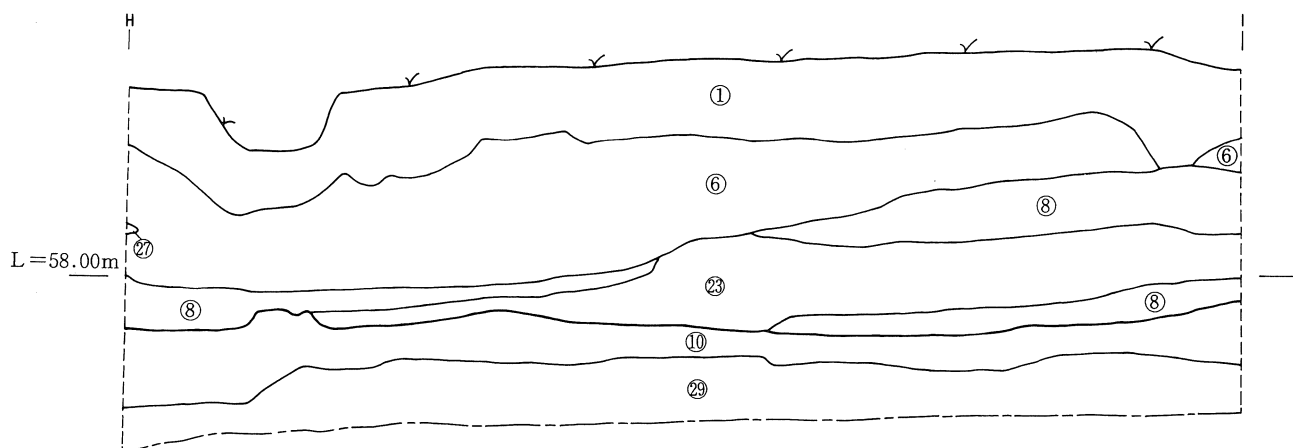
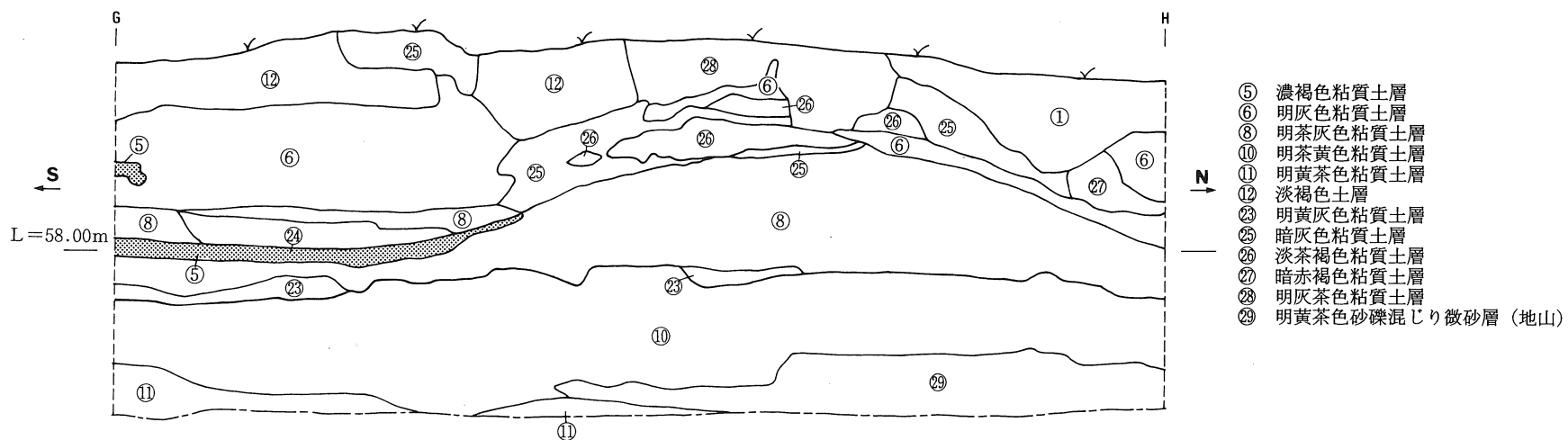
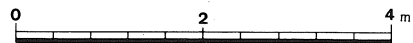


図14 東側破壊部土層図No.2 (S = 1 : 80)



#### IV 出土遺物

以前から六道山古墳の位置する矢田丘陵上や、六道山古墳を初め丘陵上に展開する古墳の下層や盛土内から弥生時代中期後半から後期の土器片が出土することが知られていたが、今回の緊急調査でも、古墳盛土内から弥生土器片をはじめ、若干の古墳時代の遺物など以下に示すような遺物の出土がみられた。

##### ① 土器 (図15)

1～4は、底部断片である。いずれも平底～やや突出した底部を有する底部断片で、大半は磨滅剥落のため調整等不明であるが、2は内面ハケメ、外面ヨコナデ、3は内面ハケメの痕跡を残す。

5は、高杯脚部断片である。脚部は中実であるが棒状工具による刺突のため中空状を成す。外面ハケメの痕跡がかすかにうかがえる。

6は、流水文を施す壺の体部破片である。

7は、広口壺の口縁部破片であろう。端部は下方へ肥厚して垂下状口縁を成す。わずかにヨコナデの痕跡を残す。

8、9は、甕の体部破片である。いずれも太めのやや深いタタキを施す。

10は、普通円筒埴輪の破片である。突帯部は剥離して形態は不明であるが、外面は一次調整としてタテハケ7条/cmの後、二次調整に同密度のヨコハケを施す。内面は押捺後、タテの指ナデを施す。胎土は精良、焼成は良好。土師質で赤褐色を呈する。川西編年Ⅳ期に相当するものであろう。この埴輪の出土層位は明らかでない。

11は、須恵器杯身(たちあがり部～受部)の小片で、12は、杯蓋(体部～口縁部)の小片である。

11、12は、いずれも墳丘盛土⑥層より出土した。TK-47型式に属するものである。

以上のように、墳丘盛土内から弥生時代後期(V様式)を主体とする土器片に混じて6のように、一部中期中葉にさかのぼる土器片が数点見られた。また、今回出土した古墳時代の遺物は六道山古墳の築造時期の上限を示す資料となり得るであろう。

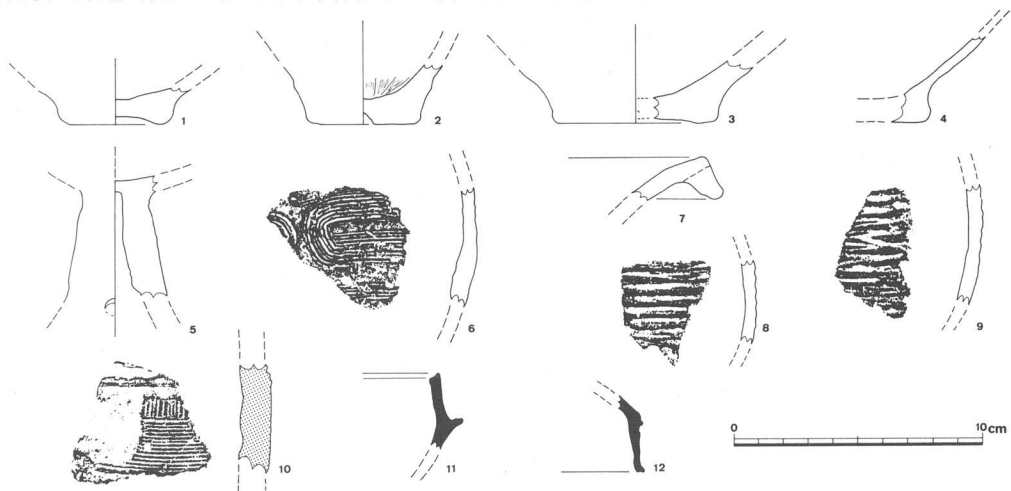


図15 六道山古墳出土土器実測図 (S = 1 : 3)



② 石器 (図16)

今回の調査では15点のサヌカイ製石器および剥片が出土している。そのうち、石鏃1点、および細部調整をもつ剥片を2点図示する。

S1は、凸基有茎式の石鏃である。縁片の調整は鋭角に比較的粗く行われており、全体としても粗雑な仕上がりである。高38.2mm、幅16.4mm、厚さ7.8mmを測る。

S2は、細部調整をもつ剥片である。素材は縦長の剥片が用いられている。刃部の調整は片側のみで、ごく浅い。

S3は、横長の剥片を利用したものである。細部調整は素材に対し鋭角に施され、刃先の角度は鈍いものとしている。なお、刃部先端に使用に伴うと思われる細かな階段状剥離が観察される。

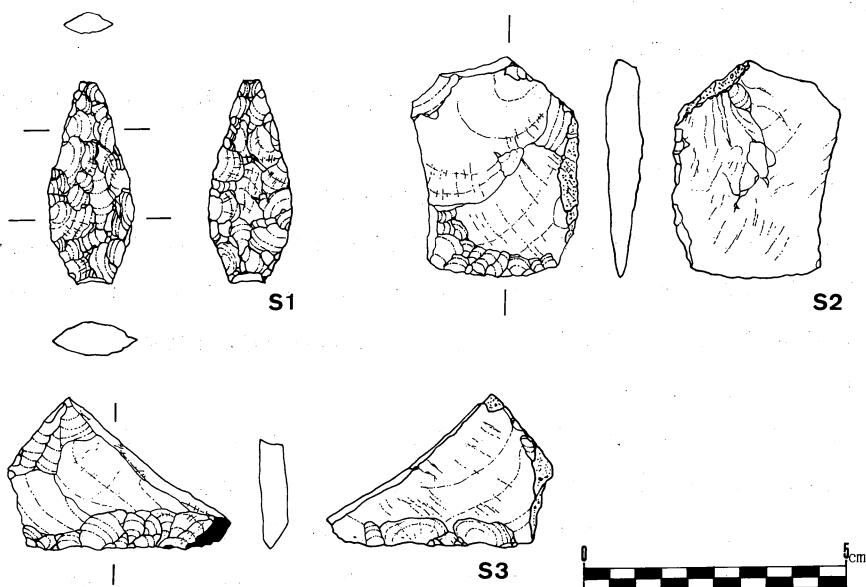


図16 六道山古墳出土石器実測図 (S = 1 : 7)

## V ま と め

今回の調査は、まさに破壊の後始末であった。しかし、墳丘の盛土内からTK-47型式の須恵器が出土したことにより、従来与えられてきた築造年代を見直す必要が認められ、大きな成果を生む結果となった。すなわち、六道山古墳築造時期の上限をTK-47型式期に置かざるを得なくなったのである。これまでは前期末～中期前葉という年代観、編年観の中で、小泉大塚古墳に後続するものとして評価されてきたが、今回の知見によって変更を余儀なくされたようである。当該地の主要古墳の系列は、小泉大塚古墳—瓦塚1・2号墳—（ ）—六道山古墳—小泉東狐塚古墳—小泉狐塚古墳—笹尾古墳と考えるのが妥当なようである。しかし、今回の地では、六道山古墳の築造年代の上限を画定したに過ぎないのも事実であり、築造時期の確定にはさらに調査を積み重ねていく必要がある。特に小泉東狐塚古墳からはMT-15型式の須恵器が出土しているので、この2古墳の先後関係には留意すべきと思う。当該地一帯は、盆地北西部にあって特に大形古墳の集中する地域であり、安定した在地勢力の存在が想定されてきた。その中でも六道山古墳は最大規模を誇っている。今後、この古墳の存在意義や出現の背景を十分に考究する必要がある。以後の調査に残された課題は多い。

非常識な破壊行為を原因とする緊急調査であったが、思いのほか重要な知見をもたらす結果となった。しかし、このことに満足感や安堵を抱くことは慎まねばなるまい。逆に無知と非常識がかかる重要な知見をもたらす原因となったことを忘れてはなるまいし、かつ、厳しく恥ずべきと思う。

## 参 考 文 献

- ・奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県の主要古墳Ⅰ—緑地保全と古墳保護に関する調査報告1—』1971年 奈良県教育委員会
- ・秋山日出雄編『大和国古墳墓取調書』1985年 財団法人由良大和古代文化研究協会
- ・奈良県立橿原考古学研究所編「六道山古墳周辺試掘調査報告書」（『奈良県遺跡調査概報』1981年度第1分冊）1982年 奈良県立橿原考古学研究所
- ・奈良県史蹟名勝天然記念物調査會編『奈良県史蹟勝地調査會報告書第11回』1925年 奈良縣

## 図版目次

- 図版1 六道山古墳空中写真 (S = 1 : 1,500)
- 図版2 六道山古墳空中写真
- 図版3 六道山古墳空中写真 (S = 1 : 17,500)
- 図版4 1. 破壊直後の状況 (墳丘東側)  
2. 調査風景 (墳丘東側)
- 図版5 1. 墳丘西側土層 (柱状図A付近)  
2. 墳丘西側土層 (柱状図B付近)
- 図版6 1. 墳丘西側土層 (柱状図C付近)  
2. 墳丘西側土層 (柱状図D付近)
- 図版7 1. 墳丘東側土層 (柱状図E付近)  
2. 墳丘東側土層 (柱状図F付近)
- 図版8 1. 墳丘東側土層 (柱状図G付近)  
2. 墳丘東側土層 (柱状図H付近)
- 図版9 1. 墳丘東側土層 (柱状図I付近)  
2. 墳丘東側土層 (柱状図J付近)
- 図版10 1. 墳丘出土土器 (S ≒ 1 / 3)  
2. 墳丘出土石器 (S ≒ 1 / 1)



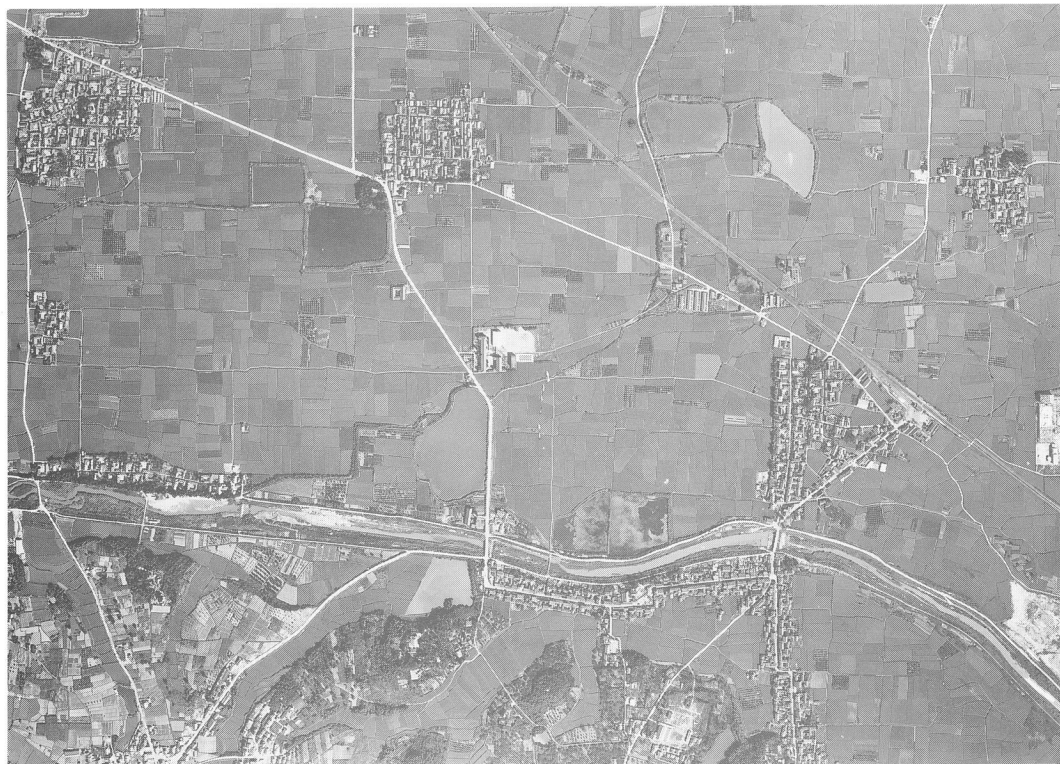
六道山古墳空中写真 (S = 1 : 1,500)

1963年9月28日撮影



六道山古墳空中写真

南上空から、1987年11月20日撮影



六道山古墳空中写真 (S = 1 : 17,500)

1963年9月28日撮影 立体視可能です



1. 破壊直後の状況（墳丘東側）



2. 調査風景（墳丘東側）



1. 墳丘西側土層（柱状図A付近）



2. 墳丘西側土層（柱状図B付近）





1. 墳丘西側土層（柱状図C付近）



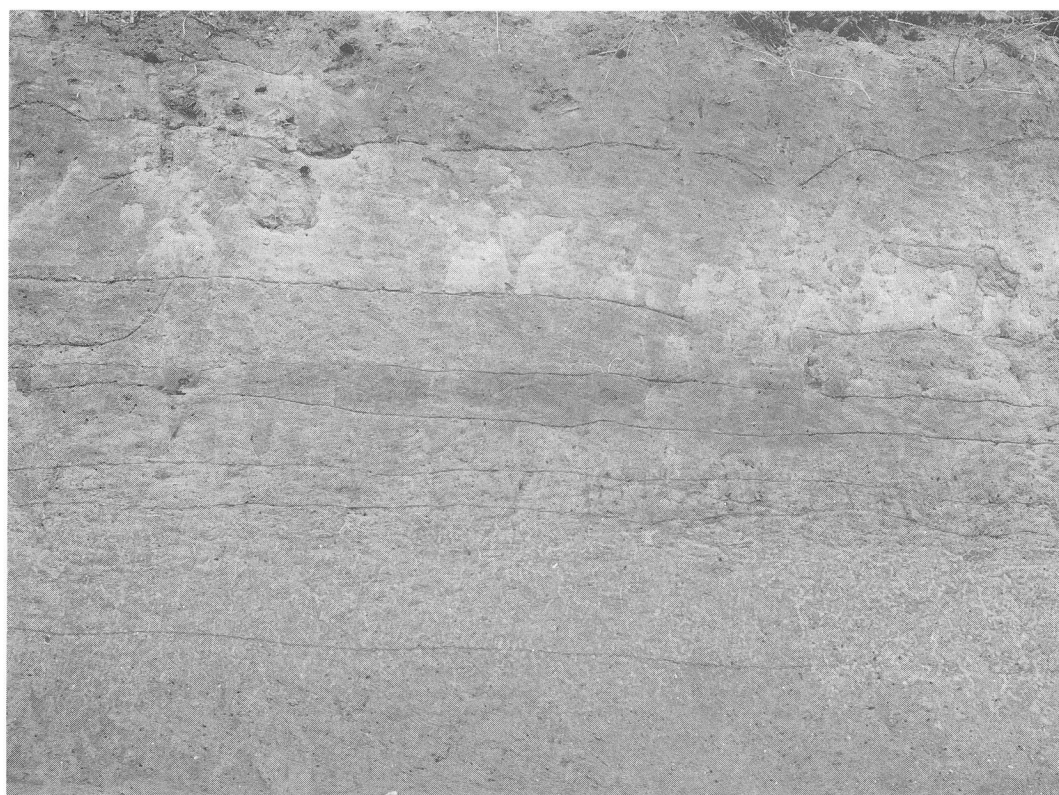
2. 墳丘西側土層（柱状図D付近）



1. 墳丘東側土層（柱状図E付近）



2. 墳丘東側土層（柱状図F付近）



1. 墳丘東側土層（柱状図G付近）



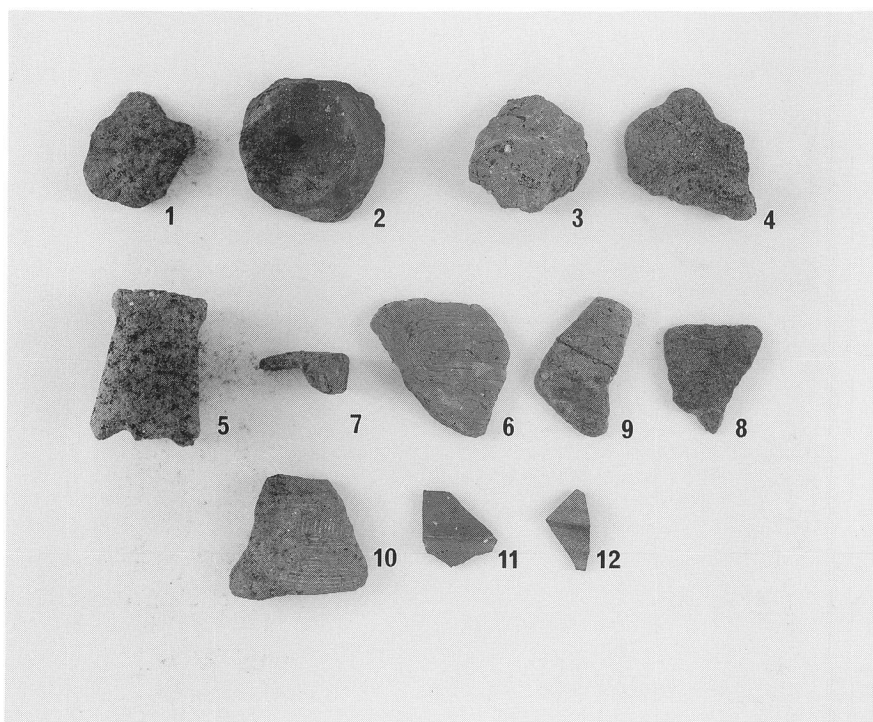
2. 墳丘東側土層（柱状図H付近）



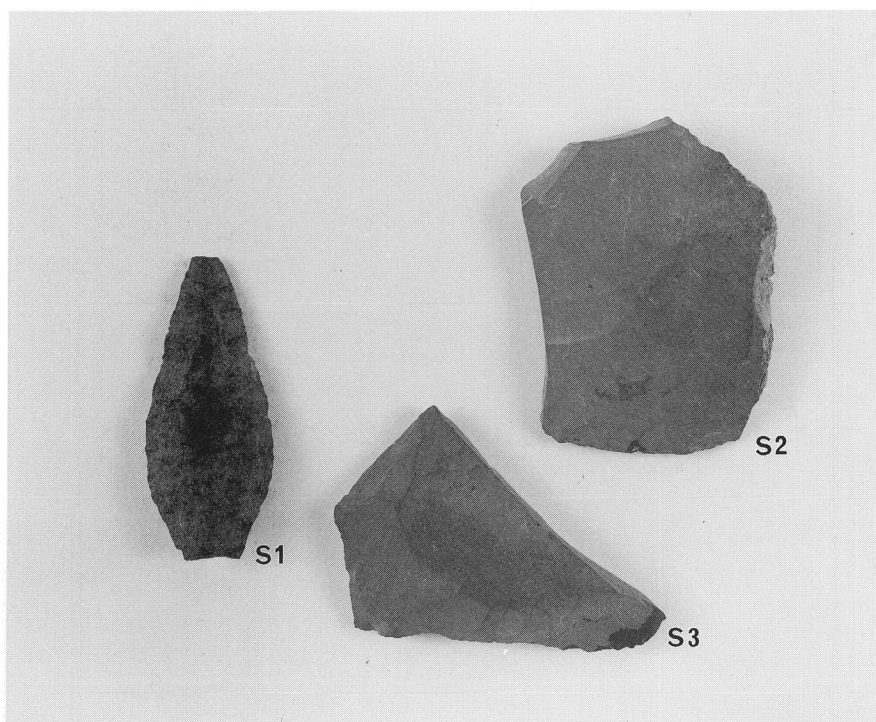
1. 墳丘東側土層（柱状図I付近）



2. 墳丘東側土層（柱状図J付近）



1. 墳丘出土土器 (S≒1/3)



2. 墳丘出土石器 (S≒1/1)

大和郡山市文化財調査概要23

六道山古墳 I

第2次緊急発掘調査報告書

---

(発行日) 1992年 3月 31日

(編集・発行) 大和郡山市北郡山町248  
大和郡山市教育委員会

(著作権所有) 大和郡山市教育委員会

(印刷) 共同精版印刷株式会社

奈良市三条大路2丁目2番6号